



本丸を出る津軽為信像 (1944年8月8日・弘前市所蔵)

弘前市のシンボルが弘前城であることに異論はないだろう。春の「さくらまつり」も、全国的に有名だ(以前は観桜会と書いていた)。

しかし廃藩置県当初、弘前城内に桜はなかった。桜は有志の手によって、日清・日露戦争前後、何度かにわたって植えられた。その桜が見頃となった1918

に親しまれてきた。

ところが太平洋戦争末期、資源に乏しかった日本は、全国的に金属回収を徹底した。各地で日用品から骨董品、そして寺の梵鐘までもが回収の対象になったことは、よく知られている。

この金属回収によって、日本各地の貴重な文化財が、軍需資源として回収され、消滅していった。この事実を忘れてはならない。

田山の麓に立てられた後藤房之助伍長の銅像である。

後藤伍長は、八甲田雪中行軍遭難事件で最初に発見された人物として有名だ。

後藤伍長の銅像は金属回収に遭わず、敗戦後も撤去されずに残った。今では、青森市の観光地の一つとして有名になっている。戦争のさなか、藩祖は撤去されても軍神は撤去されなかったわけだ。

津軽為信像の「出陣」

中園裕

(文化振興課県史編さんグループ)

(大正7)年の5月から、観桜会も始まっている。戦前までの弘前城には、桜のほかにもシンボルがあった。弘前藩初代藩主の津軽為信像である。

1906(明治39)年9月、弘前市は藩祖300年記念事業を挙行した。為信像は、その3年後に本丸跡に立てられ、弘前城から眺める岩木山とともに、市民

の対象に選ばれた。市議会でも議論になったが、軍からの強い要請もあり、撤去が正式に決定した。

1944(昭和19)年8月8日、銅像がいよいよ撤去されることになる。市民はそれを惜しみ、「為信公の出陣」と銘打って、武者行列で盛大にパレードして見送った。

これと対照的なのが八甲

2004(平成16)年、為信像は弘前市文化センターの正面玄関口に再建された。戦前の像が左足を前に出しているのに対し、再建された像は右足を前に出しているところがおもしろい。しかしいずれにせよ、藩祖が信が弘前市民に親しまれ、大切にされてきたことには変わりない。